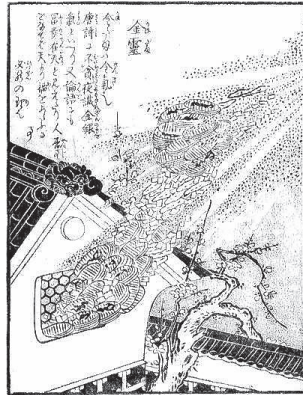


大阪人の合理主義が生む品格

お金は魔物(まもの)でござるからござる...



鳥山石燕『今昔画図続百鬼』より「金霊」(1779年刊)

「いかな怪盗でも千両箱みたいなもん、抱えて屋根の上を走って逃げられるモンやおまへん」と、大阪商業大学の明尾圭造、池田治司 両先生は言う。「ウソや思うなら、これをもってみなはれ」と、なんと二千両箱を目の前にどんと置いた。と言っても同大学の商業史博物館(東大阪市)にある箱は本物だが、目方はなまりを入れて二千両に合わせた体験用である。小判のサイズも時代で異なり、天保小判で計算している。1枚は重さ3匁(1匁は3.75g)、2000枚で22.5kgとなる。「小学校二、三年一人分ぐらいあります。両脇に抱えて走れば腰は抜けるし、屋根も抜ける、舟に飛び乗ったらドボンかも～」と大見得を切った。さすがはその道の研究者である。

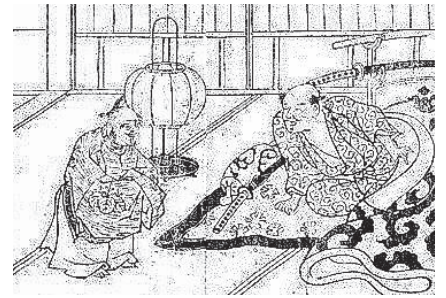
お金とは不思議なモノである。その性質は本来、寂しがり屋で、お札など一人であるのが寂しく、われわれ同様といった連中の財布からは逃げ出し、大勢集まりたがる。金持ちの財布に集まりやすい。ひょっとすると硬貨や紙幣にも、魂が宿しているのかもしれない。

鳥山石燕が描いた『今昔画図続百鬼』(1779年刊)は、「ゲゲゲの鬼太郎」の水木しげるさんも参考とした妖怪画集だが、「金霊」なるものが描かれている。文字通りお金の精霊で、石燕は、蔵の中へと空から飛び込んでくる小判や丁銀を描いて、「金だまは金気也…人善事を成せば天より福をあたふる事 必然の理也」と解説した。

三年前の安永5(1776)年に刊行された上田秋成の読本『雨月物語』巻之五の「貧福論」にも、擬人化されたお金が登場する。武刃者として上杉や蒲生家に仕え、蓄財でも高名な岡左内の前に、「黄金の精霊」が「ちいさげなる翁」の姿であられる。仏教や儒教が説く人の道とは異なる別の原理で自分たちが動いていることを語るのである。

秋成は曾根崎(大阪市北区)に生まれ、晩年京に移るまでは大坂で活躍した。精霊の衣に豊臣家

の五三桐が描かれ、家康を示す漢詩を唱えるなど、意味深長だが、政治や道徳とは異なる存在として経済や金融の法則があることを、精霊に語らせたようにも思われる。天下の経済を牛耳った大坂人の合理的なものの見方が、怪異溢れる『雨月物語』の文学者にも宿っていたのであろう。



『雨月物語』より「貧福論」の「黄金の精霊」

「がめつい」「金にえげつない」といった偏った大阪のイメージを、喜んで全国発信している大阪人に出会うことがあるが、本来の大阪人はそれを嫌ってきたのではなかったか。むしろ商都でこそ培われた合理主義の精神には「黄金の精霊」のような気品があったのではなかろうか。

身内の話だが、三十年ほど昔、心齋橋筋のさる老舗呉服店の番頭さんが、晴れ着を届けにこられた。家は婦人ひとり、お茶を入れようと、代金を入れた封筒を応接机に置いたまま席を立ちかけたら、番頭さんにとめられた。

「お金は魔物でございますから…」

支払いが双方の間で完了ないうちに、大金を残して場を離れると、どんな間違いがおきるかわからないというのである。「お金は魔物」でも、現代の大阪の雰囲気とは印象が違う。かつては不慮の出来事を回避する合理主義精神と、それをさりげなく立ち居振る舞いにあらわす古き大阪商人の品性が残っていたように感じるのである。

話を最初に戻して、時代劇の虚構に鋭く迫る商大博物館の展示も、竿頭一步を進め、1万円札1万枚つめこんだ1億円と同じ重さの体験用ケースも拵えたら、千両箱とどちらが重いか軽いか? いやそれよりも、むかし手渡しでもらった給料袋の手触りが懐かしくなってきた。昨今は当方も財布の軽いこと軽いこと…。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像」(創元社)など。